日本人にとって英語とは何か
――異文化理解のあり方を問う

大谷泰照　著

大津由紀雄
（慶應義塾大学教授）

中高の先生がたが教科指導や生活指導などで寸暇を惜しんで日々を送っておられることは十分承知しているつもりである。それでも，英語教育関連の講演の折に，「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想／行動計画」を読んだことがあるかたの挙手を求めると，よくて2割，悪いと1割に満たない現実を前にすると，もうひと踏ん張りしていただきたいという思いを禁じ得ない。

言語教育政策研究の第一人者による本書は通り一遍の英語教育史では味わうことのできない珠玉のことばで満ちあふれている。「特に日本人学生の言語に対する姿勢は，政治や経済の動きにつれて，実に敏感に変化していることがよく分かる」（p. 83）という分析，英語教員の本来の役割は「単に英語という特定の言語だけでなく，ひいては異質の言語・文化一般に対してわれわれの目を見開かせることにも通じるはずである」（p. 100）という洞察，異言語教育の立場からみれば，「おそらく，いま本当に問われているのは，異言語の単なる運用技能や目先の実用効果よりも，むしろその教育に対する基本的な姿勢そのものであるといわなければならない」（p. 141）という主張，いま異文化理解にとって必要なのは，「文化の序列志向に導きやすい『比較文化』的発想よりも，むしろ個別文化の固有の価値に着目する『対比文化』的発想であるように思われる」という指摘（p. 179），学校英語教育は「『国際語としての英語』教育という聞こえのよい一枚看板を下ろすべきではないか。そして，『日本語から最も遠く隔たった言語の1つとしての英語』教育として，とらえ直される必要があろう」（p. 193）という提案，等々。一度読み始めると，読者の気持ちをとらえて離さない。

こうした根源的な問題の他にも，近年しばしば話題にのぼるTOEFLにおける日本人のスコアの低さをどのように解釈すべきなのか（第1章〈2〉）のような，現実の問題に直結する洞察も本書のいたるところにちりばめられている。

本書には長年にわたる著者の研究の精髄が異文化理解という視点から凝縮されていて読み応えがある。先生がたには，忙中の閑を見つけて，ぜひ本書を手に取っていただきたい。

現実に流されることなく，日本人が英語とどう対峙すべきかを考え，英語教育という営みの本質を探るための必読書である。

英語類義動詞の構文事典

小野経男　著

杉岡洋子
（慶應義塾大学教授）

英語を話したり書いたりできるようになるには，動詞の適切な使い方の習得が肝要である。これは英語を教える者として常に痛感していることだが，いざその方法となると容易ではない。説明や用例が豊富な学習者用辞書でも，どの動詞をどういう文型で使えばいいかを見つけられない場合もあるし，類義語辞典（Thesaurus）で適切な動詞を探そうとしても，類義語同士の意味や文型の違いまで説明してあるわけではない。

そこで本書は，よく使われる動詞を「取得」「発話」「作成」「位置」「認識」「思考」といった22のグループにまとめ，それぞれ5つ程度の類義語動詞を挙げ，その用法と意味の違い，代表的文型の例文と説明，基本文型を変化させた構文を示したものである。読者は，あらわしたい内容に応じて適切な動詞を選べるだけでなく，それを文脈に沿って正しい文型で使うために必

要な情報を，ふんだんに得ることができる。

例えば，発話関係(1)（8.1）では，「連語関係の差」で，that 節と wh 節（say，tell），二重目的語（tell），不定詞句（say），名詞句＋不定詞句（tell），名詞句＋前置詞／副詞（talk ［into /out of］，tell ［apart /from /off］）など，可能な文型の違いが示される。「意味の概略相違表」からは，tell，say が「命令」，talk，speak が「説得」，talk，tell が「相談／会談」，tell が「理解」を他の類義語に比べて強くあらわす，といった細かな意味の違いがわかる。これら類義語同士の共通点と相違点は，一覧表で全体像をつかみやすくなっている。その上で，後続要素（文型）ごとに動詞の用例（日本語訳付き）が解説される。ここでは，どういう目的語を取りやすいか（talk と speak では後者の方が大規模な相手に使うなど），前置詞句を含む成句（talk someone into，speak out など）についても，それぞれに豊富な用例と解説があり，アメリカ・イギリス英語の違いも教示してくれる。さらに，各章の後半では，受動態，２重目的語，結果叙述，主語や目的語の交替など，基本文型からの変化の可能性における類義語同士の違いがその具体例と共に解説されている。

本書は，単に「通じる英語」よりワンランク上の，正しく適切な英文を書いたり話したりするために最適なガイドブックとして，英語の教育者と学習者に広く勧められる。また，英語の動詞が作り出す構文の豊かさと文法の規則性を知る上で，英語研究に興味をもつ読者にとっても非常に有益な事典である。

改訂新版　通訳教本

英語通訳への道

日本通訳協会　編

阿部一
（阿部一英語総合研究所）

「通訳」ということばはいつの世でも多くの人を魅了する。現在も本格的なグローバル時代に突入して，優秀な通訳者のニーズは引きもきらないし，子どもたちの将来なってみたい職業のひとつにあげられることも多い。

本書はそういった通訳の世界や現場，通訳の種類，通訳になるための基礎的な知識と練習，そして通訳技術の本格的な訓練の実際などを具体的に包括的に扱った総合的な案内書で，これまでに出た類書の中でもそのカバーしている領域の広さと，理論的な裏打ちや具体的な訓練や練習法などの体系化からすれば，明らかに決定版のひとつといえよう。

元々，本書は1976年に刊行されロングセラーとなっていた『英語通訳への道』の全面改訂版であり，各方面から新時代を迎えての改訂版，新訂版が切望されていたものである。何せ通訳という極めて専門性の高い分野なのでそんなに多くの類書があるわけでもなく，そんな中でも本書の旧版は貴重な存在であった。

本書は全面改訂で新しい専門分野の知見や最近の実証研究の成果なども多く取り込んでの解説書であり，個人でも本文の解説と付属の CD をうまく使えば１人でも簡単な練習などは行なえるようになっている。

興味深いことは本書で取り上げられているような通訳のオーソドックスな訓練法のいくつかは，シャドーイングを典型として，けっこう中学校や高校などの英語教育の現場で導入されそれなりの効果をあげているという事実である。そして，学校の教育現場で，一言，生徒たちに「この練習法は通訳の人たちも基本練習として必ずやっているんだよ」と付け加えてあげると，彼らの目が輝き出して真剣に練習するのである。

今後は，本書に出ているような通訳の技術訓練や心構えの指導に加えて，通訳者として身につけておかなくてはいけない最低限の歴史，社会，人名，地名などのミニマム・コモンエッセンシャルズ（明示的に出しにくいだけにやっかいである）の構築と整備をしていく必要があるかもしれない。

本書の「はじめに」で代表著者の向鎌治郎氏は「ことばの通訳」は「ことばだけの通訳」ではないと述べられているが，味わい深いことばであり，まさにそこにこそ一流通訳者になるための大きな鍵が隠されているといえよう。